

琉球大学大学院医学研究科 胸部心臓血管外科学講座 (第二外科) 教授 古川浩二郎 先生



○西江先生 先生は、令和2年9月から琉球大学大学院医学研究科胸部心臓血管外科学講座(第二外科)教授にご就任されております。遅ればせながら、ご就任おめでとうございます。ご就任にあたってのご感想と今後の抱負をお聞かせ下さい。

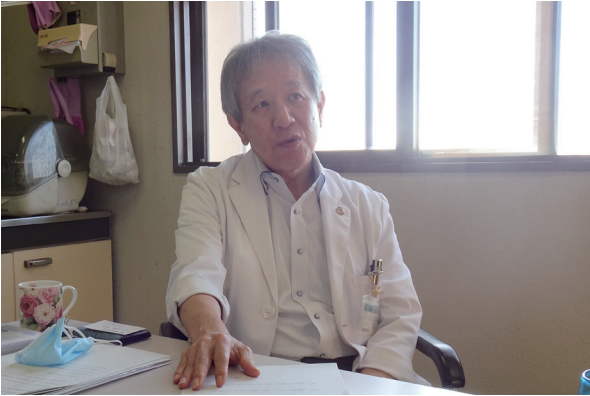
○古川教授 非常に楽しく仕事をさせてもらっている、というのが率直な感想です。西江先生にもご協力いただいております。ありがとうございます。

第二外科というのが、開講40周年の講座で。初代が草場昭先生でその後、古謝先生、国吉先生、そして私ですけど、古謝先生が胸腹部大動脈瘤、世界的にもその時代の外科の第一人者でした。そしてバッド・キアリ症候群の外科治療も確立されました。大血管の臨床を伸ばされているんですね。そのような教室なので、もちろん私はその歴史を引き継いで、そこを伸ばしつ

つプラスアルファで、より発展させるというのが私の教授としての使命だと思っています。

○西江先生 もともと先生は、例えば心臓血管外科とか、どんな思いからなられたのかお聞きしたいのですが。

○古川教授 学生時代はものすごい劣等生で、野球しかしていませんでした。全く勉強していなくて、1年生の時にほとんど単位も落としてですね、卒業が危ういと学長に呼び出されたりして。そこで、さすがにやばいと思い一念発起して、一応留年せずになんとか卒業出来ました。外科には行こうと思っていましたが、心臓血管外科をやるんだみたいな感じはありませんでした。厳しい世界じゃないですか、選ばれた人しか出来ないみたいな。昔は特にそういうのがあったので。



○西江先生 心臓血管外科のベッドサイドとか回った時に、やっぱり雰囲気的にピリピリ感がありました。カンファレンスもちょうど違いますがもんね、それは感じていました。

○古川教授 そういう世界なんですけど、その時の教授がですね、もともと九大の出身の先生で伊藤翼（イトウ ツヨシ）先生が僕の師匠なんですよ。若くしてアメリカに行かれて、アメリカから帰国後、佐賀大学の第二代の教授です。その方は、典型的なスポーツマン、九大本学の野球部だったんですよ。最後の医学部出身の本学野球部。九州六大学リーグで活躍されていました。

○西江先生 それはまた本格的ですねえ、じゃああのレベルなんですね。

○古川教授 非常に高いレベルで野球をやられてて、運動神経もよくて、昔は、医局対抗野球ってあったじゃないですか。今はもうないですけど、その時に僕は野球部だったので、スカウトされた感じです。全く心臓血管外科医になるとは学生時代は思ってもいませんでした。人の縁でなったというのが正直なところですね。

○西江先生 実は僕、放射線科に入ったのも人の縁でして、例えば放射線科の先生の家庭教師をしたりだとか、知っている良い先生が仲良くしていただいたりとか、あとは医科学研究とかそういうところでお世話になった先生が放射線科だったりして、人の繋がりが入った感じな

ので、先生と似ているかもしれませんね。

○古川教授 放射線を絶対にやる！みたいに選ばれたわけじゃなくて。僕もそうなんですよね。外科をやろうと思ったら、別に心臓血管外科しかしないというのは全くなくて、本当に人の縁でここに至るみたいな感じです。

○西江先生 古川先生が目指している講座の運営方針についてお聞かせください。

○古川教授 分かりやすく言うと、一人ひとりがやりがいを持って、自ら動く、自ら考える、楽しくやる、という教室にしたいです。

○西江先生 ある程度、マンツーマンで指導をしたりだとか、そういう感じもありますか？

○古川教授 マンツーマンで指導するというよりは、方針としては、とにかく教授からのトップダウンではなくて、一人ひとり考えて行動して欲しい。自らやって欲しい。自分がやりたいこと、言いたいことを言って欲しいし、結果として、まとめるのは私なので、全体を上手くまとめる。あとはやっぱり、みんなで助け合うという、沖縄の昔ながらのゆいまーるの精神ですよ。そういうのを持ってほしいですね。その結果として、チーム全体として、同じ方向を向いて、お互いに切磋琢磨して、良い意味でライバルとしてがんばってもらって、全体としてどんどん伸びていく、そういう教室にしたいなと思っています。とにかく全ての人に楽しく仕事して欲しいです。

○西江先生 人材育成など教育面で、工夫されていることはありますか？

○古川教授 さっきと繋がるんですけど、命令するわけではなくて、なるべく本人に考えさせる機会と時間を与えて、その後はちゃんとフォローアップし、しっかりディスカッションをするという感じですかね。

○西江先生 先生、とても参考になります。

○古川教授 なぜかと言うと、僕がそのようにして育ったから。伊藤先生は昔じゃ考えられないタイプの教授でしたね。今はそういう教授もおられるのかもしれませんが、やっぱり教授の理想像というか、目指すところはそこですね。

○西江先生 ありがとうございます。

第二外科の方で、特に力を入れている研究、先生はもうかなり先進的な手術もされていると思いますので、そのあたりをお聞かせいただけたらと思います。

○古川教授 1つは先ほどお話したように、大動脈外科というのは歴史もありますので、その分野における新しいところですね。具体的に言うと、大動脈の手術で唯一残っている合併症、脊髄障害だけは未だに世界的に見ても、こうしたら起きませんよという方策がなくて、まだ各施設で模索しているところです。だいぶ減少していますが、世界的に見てもある一定の確率で発生しているんですよ。それをともかく、大動脈瘤外科手術における脊髄障害をゼロにしたいというのが大きな目標ですね。

○西江先生 それはもうアダムキュービッツに限らずということですよ？

○古川教授 そうですね、アダムキュービッツも一つですけどそれだけではないので。メカニズムがまず分かっていないんですよ。それが分かっていないから解決策も当然ない。唯一残された大動脈瘤外科手術の課題の一つですよ。

○西江先生 動物実験とか、基礎的なところから加えていくという感じですか？

○古川教授 今はやっていませんが、以前は行っていましたし、今は再生医療とか、清水雄介先生がみらいバンクをされているじゃないですか。あれは予防ではなく、治療になるんです



けど、脂肪幹細胞を脊髄の軟膜下に打ち込むと、虚血性の脊髄障害が改善するというデータが出始めているんです。それは予防ではないですが、脊髄障害に対する治療の一つにはなる。非常にそれは先進的な研究で、僕たちも少しアドバイザー的に関与しているので。

○西江先生 しかしそれがあると、安心して手術が出来るという裏返しでもありますでしょうか。

○古川教授 ただ治療として実際使えるとしても10年後、20年後の話ですからね。今の我々がやるべきことはとにかく予防なんです。起こさない。それと並行して、先を見越して起きた時にどうするかみたいなことも考えていますよということになります。

あと、大動脈基部。昔は人工弁に置換していた手術を、出来るだけ自分の弁を残す。臨床的にそれをテーマにしているのがひとつ。あとは、心筋症ですね、肥大型心筋症の手術。沖縄では人工心臓の手術は琉大でしか出来ない。いわゆる拡張型心筋症とか、そういう治らない病気、最終的には心臓移植になるような疾患に対しては、心臓移植しかない、そのあたりの研究ですかね。それをやっています。

○西江先生 琉球大学病院は、県内唯一の大学病院として県民から寄せられる期待が大きいと思います。県立病院を含めた他病院、診療所との連携についてどのように取り組まれている、またどのようにお考えでしょうか？

○古川教授 正直、今まではたぶん沖縄の中でまとまりと言うか、連携というのは、個人的には希薄だな、あまり繋がっていないなど。人材だとかいろいろなものがあったいなというのは沖縄に来てすぐ感じましたね。来てすぐ、色々な連携が出来るよう動いています。もちろん病院と病院の関わりも大事なんですけど、その前にやっぱり人と人との関係、個人との関係がまず構築されないことには、絶対病院同士の連携は出来ないと考えているので、基本的にはまず私の方から他の病院の先生方とお会いして、お話しして、まずは個人的に信頼されることから始めて、最終的な目標はある程度大学がいい意味で中心になって、上手く連携して、とにかくそれぞれの人、それぞれの病院同士が上手く連携しながら、お互いのいいところを出しながら、まとめて、最終的に沖縄県全体でね、良い医療を沖縄の人に提供するというのが最終目標だと思いますね。そこを考えてやっているつもりです。

○西江先生 さまざまな勉強会があるんですけども、そのあたりも出席等して、しっかりコミュニケーションを取るとというのがやはり大事なのかなと自分でも思っているの、かなり精力的に。

○古川教授 基本的にはそうなんですけど、まずは患者さんの相談とかもどンドン気軽にし

てくださいよと言っています。それは患者さんを来させるのではなくて、基本的に電話があったらすぐ私が診に行っています。結局大学って外から見ると僕らが考えている以上に高い壁があると僕は思っているし、実際外の人たちはそう思ってるので、絶対私の方からどンドン患者さんのベッドサイドに行くというのを基本にしています。僕がそうすると、それって多分医局員は知っているの、口ではもちろん具体的にはあまり言いませんけど、そういう姿勢を見せるようにはしています。そうしないとやっぱり患者さんは集まって来ませんし、人も集まって来ないと思っています。

○西江先生 ものすごく勉強になります。あと、離島に関してはいかがですか？遠距離であるので、サポートの仕方が近隣とは違うかと思うのですが。

○古川教授 離島は気軽には行けませんが、結構行っています。石垣島は定期的に行っていますし、宮古の県立はこの内科の先生が繋がっているの、そのツテで連絡は結構取り合いますし、私の携帯に直接向こうのスタッフから連絡がきたりもします。プライベートヘリや、ジェット機で、もうちょっと気軽に行きたいですけれどね (笑)。それくらいの気持ちです。



○西江先生 日頃健康のために気を配られたり取り組まれたりしていることはありますか？

○古川教授 やっぱり睡眠ですね。睡眠をしっかり取るということと、毎朝ウォーキングやジョギングをやっており、なるべく体を動かすようにしています。

○西江先生 今頃は、朝はちょうど気持ちいいですね。私も出勤する時にリフレッシュして来れるような気がしています。

○古川教授 ただちょっと、陽が明けるのが遅いじゃないですか。朝早く起きるとまだまだ暗いので、もう少し明るくなるのが早いといいですけどね (笑)

○西江先生 あと先生のご趣味は、野球をずっとされていたとおっしゃっていましたがどうも。

○古川教授 今はもう、観戦の方で。沖縄はキャンプがありますので、これまで行く機会がありませんでしたが、来年からは、キャンプ巡りもしたいなあと思っています。

○西江先生 あと、座右の銘とかはお持ちでしょうか。

○古川教授 「敬天愛人」ですね。天を敬い人を愛す、西郷隆盛が座右の銘にしていた言葉です。とにかく天命に従って生きるということと、人に対して批判をしないと、人を責めない。

P R O F I L E

| | |
|-------------|-------------------------------|
| 昭和 63 年 3 月 | 佐賀医科大学医学部医学科 卒業 |
| 昭和 63 年 6 月 | 佐賀医科大学医学部外科 医員 |
| 平成 15 年 7 月 | ベイラー医科大学 (アメリカ、ヒューストン) 研究員 |
| 平成 23 年 4 月 | 佐賀大学医学部 胸部・心臓血管外科 准教授 |
| 平成 30 年 8 月 | 九州医療センター循環器センター 統括運営部長 |
| 令和 2 年 9 月 | 琉球大学心臓血管外科 教授 |

結局何かあった時の、悪い結果とかは自分の誠実さが足りない、努力が足りないという考え方ですかね。自分がそうじゃない人間なので、そういう言葉を肝に銘じています。

○西江先生 最後に、沖縄県医師会に対して、ご意見・ご要望がありましたらお聞かせ下さい。

○古川教授 途中で話したように、沖縄県の医療を考えた時には、やっぱり大学をある程度中心にしながらまとまっていく医療を。沖縄って多分まとまれるはずなんですよ。他の地域では難しいですが、沖縄では出来ると思うので、そういうまとまるための潤滑油というか、それを医師会の方々にしていただくといいのではないかと思います。

○西江先生 たくさんお話をお伺い出来ました、本日はどうもありがとうございました。

インタビューアー：広報委員 西江 昭弘

